卵の量感

『新壘』
43-1号

偽りごと昨日にとどめむはりはりと喰ぶるは冬の朝の生キ
ヤベツ

ひややけと一つの命割りて呑む卵の量感未だ掌に残し

死者を喚ぶ裡なる声の杳渺とひびきこもりて夏の曇天

梅雨晴れの鋭き陽ざし向日葵はその高慢も宥されて咲け

青青と葉を張り合へる君子蘭月照る夜のこころ緊りぬ

冬の日

『新墾』
43-2号

生くる方位見失ひきし夜にきく川瀬の音の確かなる韻律

冬の掌より取り落したる牛壺の乳のこぼれて地に白きかな

塩壺も糖壺も光る冬にして暗示の如きかなしみはあり

きこえ来る杳き誹諦もこころし冬の太陽の燦燦とまぶし

総きまで耳敬ばだててきかむかな不発花火はいづくに爆ず
る

冬の風

『新壘』
43-3号

生きる意味ただ問ひつめてかなしかり孤りと思ふ夜のこほ
ろぎ

ならぬ

ク
生きること投げ出してゐる私が習慣として磨く銀のフォ―

汚れるだけよごれて生きむ冬の自棄くせ毛を風に靡びかせ
ゆくも

過ちの繰り返しゆくこの身にせめてなぎゆく風の再び吹か
しめな

ただかなしき冬のひと夜の所作にして吾が巻く独樂は単純
に廻る

ひとりに

『新壘』
43-11号

踏まれたるあらずの徐徐に立つたべひとりの歩み還すことな
く

はりはりと夏の朝のレタス喰む岡ふものの欲しきひとりに

信号は赤に変われど吾が意志は歩みつづけりつと立つ白昼

栗色の巻毛の乙女と対ひるて夜汽車に願け合ふまろきフラ
スパン

秋の陽の短かく照らす居間にゐて思ふことの大方はつきぬ